

2016年3月6日

**「イエスを侮辱して言った。『他人は救ったのに、自分は救えない。』…」 マルコ 15:31**

主イエスは十字架につけられた約3時間（午前9時から正午まで）、肉体的な苦しみと共に精神的にも苦しめます。

兵士たちは「没薬を混ぜたぶどう酒」（麻酔の効果がある）を差し出しますが、主は飲まれません。彼らは「その服を…くじ引き」にします。「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた」（Ⅱコリント8：9）のです。

一般のユダヤ人たちは「神殿を打ち倒し、三日で建てて」（→14:58）と言ったのに「十字架から降りて自分を救」えないのかと嘲り、指導者たちも「今すぐ十字架から降りるがいい」とバカにします。「わたしを見る人は皆…頭を振る」（詩22：9）と嘆いたダビデの苦しみを今、主が味わっておられるのです。

罪状書きに「ユダヤ人の王」とあるのに合わせるように、「二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に」十字架につけます（家来か手下のように！）。彼らまで「イエスをののしった」のです。「キリストはすべての者に見捨てられ、それは強盗にまで及んだ。」（カルヴァン）

確かに主は「他人を救った」方ではありますが、そのために「自分を救」おうとされないのです。この「悩みと恥にやつれし」神の御子を、私たちは心から「かしこみ、君と仰ぐ」（讃136番）のです。

2016年3月13日

**「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」 マルコ 15:34**

主イエスは十字架の上で内面的な苦しみを経験されます（正午から3時まで）が、皆が理解したわけではありません。

春先の暑いほどの日でしたが、「全地は暗くなり」（東の砂漠からのシロッコ風のため？）、次第に暗さをまして、父なる神が顔を隠されたので、主は「大声で叫ばれ」ます。「キリストは私たちの罪のつぐないのために、神の裁きの座に罪人として出る必要があった」（カルヴァン）のです。（→ガラテヤ3：13）。

神の御子が御父から見捨てられたと感じられた時、「エロイ（わが神）…」と、ダビデのように助けを求められます（→詩22：2 ヘブライ語では「エリ」）。それを聞いたユダヤ人たちは、「（預言者）エリヤを呼んでいる」と誤解し（→マタイ27：46）、ある者は「酸いぶどう酒」（清涼飲料）を与えようとしています。

暗闇が去った時、勝利を得られた主は「大声を出して」（→ルカ23：46「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」）息を引き取られ、「神殿の（至聖所の前の）垂れ幕が…裂け」（→ヘブライ10：20）、百人隊長は「本当に、この人は神の子だった」と証言します（→1：1）。

主は「陰府（死の世界）にくだり」と言われるほどの苦しみに打ち勝って、私たちに平安を与えられます（→讃262番）。

2016年3月20日

**「百人隊長に確かめたうえ、遺体をヨセフに下げ渡した。」 マルコ 15: 45**

主イエスが息を引き取られたあと、その遺体を葬ったり、見届けたりする人々がいます。（「死にて葬られ」!）

男の弟子たちは去りましたが、婦人たちは「遠くから見守って」証人となりました。「マグダラ（出身）のマリア、小（アルファイの子）ヤコブとヨセの母マリア、そして（ゼベダイの子らの母）サロメ」など、心優しい女性たちです。

主の遺体を葬るためには、「その日は…安息日の前日（金曜日）」で、あと3時間しか残っていません。「アリマタヤの出身で身分の高い議員ヨセフ…が勇気を出して」ピラトと交渉し、遺体の下げ渡しを受けます。彼はもともと「神の国を待ち望んで」（→マタイ 27: 57「この人もイエスの弟子であった」）いたのですが、それを表明する勇気がありませんでした（ニコデモも!）。「神の御子がヨセフの手によって埋葬されたのは、神の業（わざ）であった。」（カルヴァン）

ヨセフは主の遺体を「亜麻布…で巻き…岩を掘って作った墓」に丁寧に葬ります（→マタイ 27: 60「自分の新しい墓」）。婦人たちは「イエスの遺体を納めた場所を見つめ」て、最後まで見届けます。

「いさお（功績）なき我を血をもて贖（あがな）い」（讃 271 番）給うた主を思う時、私たちも勇気を与えられます。

2016年3月27日（イースター礼拝）

**「驚くことはない。…あの方は復活なさって、ここにはおられない。」 マルコ 16: 6**

主イエスは、三日目に死人のうちよりよみがえられますが、その出来事は大きな驚きと恐れを引き起こします。

十字架と葬りを見届けた婦人たち（→ルイスの『ライオンと魔女』の少女たち!）は、「イエスに油を塗りに行く」準備をして、「週の初めの日（日曜日）の朝ごく早く」墓に行きます。入り口にあった「石は既に転がしてあった」のを見て、彼女たちは大きな力に驚きます。

「墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者（天使!）が右手に座って」いた光景は忘れることが出来ないものでしたし、「十字架につけられたナザレのイエス」の遺体がそこにもないことも確認して、ますます驚いたに違いありません。

彼女たちには、「行って、弟子たちとペトロに告げなさい」と、ガリラヤでの再会のメッセージを託されます（→14: 28）。「主は、男たちから一時的に使徒の務めを取り上げて彼女たちに委ねるという格別な名誉をお与えになった。」（カルヴァン） 重なる驚きの結果、「婦人たちは…震え上がり、正気を失って（我を忘れて）…（しばらくは）何も言わなかった」のは、無理もないことでした。

復活の主は「ここ（墓の中）にはおられ」ません。「命の君こそ…死に勝ちましけれ」（讃 146 番）と賛美しましょう。